

解答はすべて(その九)の解答用紙に書きなさい。

① 父を早くに亡くした「ぼく」は、母や弟と離れて孤児院で暮らしている。母は弟を知り合いの中華料理店に預けたまま、港町の飲み屋に働きに出たまま帰ってこない。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

I

汚点さえなければ、それはいつもの通りの葉書だった。

こぼれ落ちたラーメンの汁か、a タれ落ちたレバー炒めの汁か、それはむろん分からなかったが、淡い黄褐色の汚点を数個ばらまかれた葉書は、はじめは南太平洋地図のように見えた。オーストラリア大陸そつくりの大きな汚点の上方に、ソロモン諸島やサモア諸島と見合ういくつかの小さな点々。しばらく見つめていると、① 出し抜に南太平洋地図は大小の黄信号のb ムれに変わり、「おまえの弟になにか起ころうとしているぞ、つらいことが起ころうとしているぞ」と、ぼくにc ケイコクを発しはじめた。

弟は食費千円の < ② > から < ③ > に格下げされ、料理の汁の乱れ飛ぶ店のカウンターあたりで、葉書を書かなくてはならない身の上になってしまったのではないだろうか。汚点の中に、身長半ほどはたつぷりある出前用の岡持ち箱を細い腕で引きずって歩く弟の姿が浮かび上がった。夜の闇の中から、野の長犬が数匹あらわれて、出前持ちに牙をむく。少年は立ちすくみ、岡持ちを取り落とす、④ がちやん! ……

…ダニエル院長がストーブに薪をくべ、がちやんと音をさせてふたを閉めた。それから、葉書を見つめたままで、いつまでも事務室から出て行こうとしないぼくを見て、

「どうかしましたか？」

と、声をかけた。

弟が苦勞しているらしいんです、はつきりしたことはわかりませんが、そんな気がするんです、とぼくはいった。

「⑤ そういわれても無理なのです」

修士は先回りして釘をさした。

「孤児院の定員は三十五名です。ところが今は四十一名もいます。廊下にはみ出したベッドで寝ている子が六人もいるんですから」

そのとき、孤児院に高校生が五人いた。五人とも昼間は近くの進駐軍キャンプの中のパン工場や、孤児院付属の木工場場で働き、夜になると定時制に通っていた。それがそれまでの孤児院の規則だった。ところが、ぼくたちが高校を受験する年から、月謝の安い公立高校に合格したらという条件つきで、昼間部に通ってもよい、と規則が変わったのだ。高校生たちがぐやしがって、ぼくらから中学三年生をいじめたくなる気持ちも理解できないことはなかった。

「院長に断りに行け」

船橋はぼくらを叩きのめした後、かならずそう脅迫した。

「これまでの高校生と同じように、昼は働いて夜の高校へ行きます、と院長に申し出る。そしたらもう殴ったりしないぜ」

ぼくは全日制の高校に入れるかも知れないと聞いて、この孤児院に無理矢理もぐりこんだのだ。定時制に進むぐらなら孤児院へは来なかったろう。母と一緒に暮らしながら夜間学校へ通った方がよほどいいに決まっている。ぼくら三人の中学三年生は同じ考えだったから、たとえ⑥ 口が裂けても、院長にそんなことは申し出ないと、殴られて⑦ 裂けた口でいいはった。

その夜から、ぼくは風邪を引き、三日間、廊下のベッドに寝こんだ。熱でうなされながら、ぼくは三日間がかりで弟に返事を書いた。

手紙を投函して四日目に、弟から葉書が届いた。やはり汚点がついていた。それもただの汚点ではなく、長さ一センチほどのラーメンの切れっ端が、葉書の隅に平べったく押しつぶされてこびりついていた。ぼくが怖れていた通り、弟の身分は下宿人から使用人へ変わっていた。

受検番号

II

入学試験の前々日、寒さがぶり返し、大雪が降った。ベッドに単語帳を持ちこみ、布団をかぶって、暗記にd(セイ)を出していると、だれかがやってきて、ベッドの前に立ちどまった。こっそり布団を持ち上げてみると、立ちどまったやつの膝から下の部分が、目の前にあった。ズック靴に「船橋」と名前が書いてある。きな臭いものがつつんと鼻をついた。殴られ蹴られる前に、ぼくには必ずこの予徴があるのだった。

「よう……」

船橋はぼくに笑いかけていた。

「な、なんですか……?」

「講堂へ来ないか?」

船橋はそういうと、一メートル九十センチの高さから、ぼくの襟首をつかみあげてベッドから引きずりおろし、講堂へ引っぱっていった。

講堂には斉藤たちが待っていた。誰か止めに入ってくれないだろうか。周囲を見回したが、小学生たちが数人、見物人取りで、生唾を飲みながらながめているだけだった。

斉藤が笛を鳴らした。小学生たちが拍手をした。船橋がこつちを向いた。ぼくは後退した。「へ ㊸ へめ!」斉藤たちが、ぼくの尻を足で蹴った。ぼくは前に出た。船橋の顔が目の前にあった。逃げ場はなかった。船橋の右手がちらつと動き、それを境に、時の流れがたゆたった。

気がつくくと、ぼくは講堂の床の上に伸びていた。手拭を扇がわりにしてぼくをあおいでいた斉藤が「あつ、気がついたぜ」といった。船橋がぼくの右手を引っぱって、助け起こした。

「船橋のKO勝ち!」

と斉藤は船橋の左手を高く掲げさせ、続けてこういった。

「続いて第二試合を始めます!」

ぼくは逃げ回った。「やめてください!」と叫んだが、口は乾ききって動かず、その叫びを聞いたのは、おそらくぼくひとりだったろう。と、同時に、船橋の右がぼくの腹にめりこみ、ふたたび、あたりは零になった……。

ぼくがベッドにたどりついたのは、五回、床に倒れたあとだった。斉藤は第六試合はおろか第七、第八、第九までも続行しようと言い張ったのだが、船橋がやめるとい出したのだ。

「そんなに全日制へ行きたくや勝手に行け。おまえみたいにへ ㊹ へなやつ、見たことないぜ」

唇が少し裂けていた。左頬が重かった。鏡に写してみると、左頬は倍以上もふくれあがっている。水でぬらしたタオルを左頬にのせ、ぼんやり天井をながめていると、ダニエル院長の顔が見えた。

「ずいぶんひどく殴り合いましたね」

「なんでもありません」

院長はしばらくぼくの顔をながめまわしていた。それから、そうそう、あなたに便りがきてましたよ、とポケットから葉書を取り出した。

一目で、ぼくはその葉書が弟からのものだとうかつた。葉書の四分の三が、ひとつの㊺大きな汚点で占められていたからだ。

「あまり元気ではありません。ラーメン屋のおじさんが、母ちゃんの悪口をいいました。それでぼくは、おじさんにバカといいました。

おじさんは、ぼくをぶちました。……つらいけどがまんします。さようなら」

その大きな汚点からは、あの㊻きな臭い匂いが立ちのぼっているように思われた。母が迎えに行くまでにはあと二カ月以上も間があるはずだ。その間に、弟は何回、きな臭い匂いをかがなくてはならないのだろうか。

「院長先生。ぼくも全日制へ進むのはやめます。昼は働いて、夜の高校へ行きます」

院長は話の腰を折られた上、ぼくが突然、これまでと違うことをい出したので、ずいぶん驚いたらしく、息をのんで、ぼくを見つめた。

受験番号

Ⅲ

その夜ふけ、ぼくは凍こてついてつるつるすべる坂道を、走りながらかけくだって駅に行き、北へ行く真夜中の鈍どん行列車に乗った。(注)康こう楽らくのある小都市の駅に降りるまで、ぼくは胸のポケットを、上から手でしっかりと押さえつけていた。胸のポケットにはちり紙ちりしで幾いく重えにも包まれた十五枚の千円札が入っていたのだ。むろん、十枚は母の借金に、二枚は利子に、さらに二枚は弟の食費に、あとの一枚は弟の仙せん台だいまでの切き符ぷ代だいにと、ダニエル院長がeツゴウしてくれたものだった。

鈍行列車から降りたとき、駅の時計は五時半を指していた。あたりはまだ暗かった。

七時すこし前から小学校の校門に立って弟を待った。そんなに早く登校するとは思えなかったから、はじめは口笛などを吹いていた。七時半ごろから、登校の生徒たちの列が続いだした。弟がやってくるはずの通りをまたたきもせず見つめた。

生徒たちの流れがとだえ、始業のベルが鳴った。だが、弟はやってこなかった。あるいは見つけそこなったのだろうか。ぼくは学校に飛びこみ、教頭先生にわけを話し、弟が四年の何組にいるのか調べてもらった。親切な教頭で、弟が四年三組にいるはずだ、と教えてくれたばかりでなく、教室の前までぼくを案内し、担たん任にんの女教師を廊下へ呼びだしてくれた。

「ここ二週間ばかりずーつと休んでいますよ、あなたの弟さんは……」

「二週間も……ですか？」

ぼくは教頭と女教師に、弟の転校手続きをとるためにもう一度もどつてきますと告げ、学校を飛びだした。

康楽は閉まっていた。がたがた表戸をゆすぶっていると、弟が出て来た。半分、戸を開けかけて、弟はぼくに気がつき、

「あれ、兄ちゃん……」

と、照れくさそうに笑った。

「 A 」

「おじさんたちの御飯ごはんを炊たいているんだ。お汁も作るんだよ」

「 B 」

「いや、炊たいてくれないか、といわれただけなんだ。でも……」

「 C 」

弟は、そうだと小さな声で答えた。

「どこにいる？」

「おじさんたちのこと？」

「うん」

「二階で寝てるよ。でも、もうすぐ起きてくると思うんだ」

ぼくは階段をどンドン踏ふみ鳴らして二階へ上がった。そして、眠ねりほうけていた二人にいった。

「弟はお世話になっているんですから、働かされても仕方はありません。でも、どうして、学校へやってはくれないんですか」

「四月からはちゃんと通わせませよ」

「もういいんです。ぼくは弟を連れて帰りますから。いろいろありがとう」

弟とぼくは昼過ぎの鈍行でその町を発たった。車内は空すいていた。座席に並んですわりほつとした途と端たん、どういうわけなのか、涙なみだがあふれ出た。それを見て、こんどは弟が泣き始めた。

向かいにすわっていた老らう婆ぼが、ぼくらに声をかけた。

「兄弟けいげんかかかね？ 兄弟けいげんかはいけないよ」

それから、老婆は、その前の日、船橋に殴られてはれあがったぼくの左頬を見てにこりと笑った。

「あんた方兄弟は、弟さんの方が強いのかね？ え、こんなに小さいのに……」

(井上ひさし「汚し点み」一部改めたところがある)

(注) 康こう楽らく……弟が預けられている中華料理店の名前。

受検番号

(一) 波線部 a ～ e のカタカナを漢字に改めなさい。

- a タ(れ)      b ム(れ)      c ケイコク      d セイ      e ツゴウ

(二) 傍線部①「出し抜<sup>だ</sup>けに」の意味としてもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ゆっくりと      イ いきなり      ウ あべこべに      エ たちまち      オ しまいには

(三) < ② > < ③ > に入る適切な語句を、I 段よりさがして抜き出しなさい。

(四) 傍線部④「がちやん！」とあるが、この音について説明した次の文の【 X 】【 Y 】を補うのに適切な表現を、指定された字数で考えて書きなさい。(句読点を含む)

※「ぼく」は【 X 十五字以内 】音だと思ったのだが、実際は【 Y 二十字以内 】音だった。

(五) 傍線部⑤「そういわれても無理なのです」とあるが、それはなぜか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 孤児院で暮らしているのは中学生以上の生徒ばかりで、弟のような年少者はひとりもいなかったから。  
 イ 孤児院の子どもたちは昼間働くことを義務づけられており、弟だけが働かないわけにはいかなかったから。  
 ウ 身寄りのない子どもたちが暮らす孤児院に、母親が健在である子どもをひきとるわけにはいかないから。  
 エ 「ぼく」のベッドも孤児院の廊下に置かれているような状況<sup>じぶんじょう</sup>では、これ以上孤児を収容できなかったから。

(六) 傍線部⑥「口が裂<sup>ひ</sup>けても」、⑦「裂けた口」とあるが、このふたつの「口」とそれぞれ同じような使われ方をして

- ア ⑥それを言われると耳<sup>みみ</sup>が痛い。      ⑦あの評論<sup>ひやろん</sup>家は新人には目<sup>め</sup>もくれない。  
 イ ⑥年老いた母の手<sup>て</sup>を引いて歩く。      ⑦わざとらしいふるまいは鼻<sup>はな</sup>につく。  
 ウ ⑥事情を課長の耳<sup>みみ</sup>にも入れる。      ⑦ぬかるみに足<sup>あし</sup>を取られて困った。  
 エ ⑥まぶしくて目<sup>め</sup>が開けられない。      ⑦飛行機に乗ったら耳<sup>みみ</sup>が痛くなった。

(七) < ⑧ > < ⑨ > に入る適切な語句を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア うそつき      イ 泣き虫      ウ 傲慢<sup>ごうまん</sup>      エ 強情<sup>じやうじやう</sup>      オ 弱虫      カ 意地悪

(八) 傍線部⑩「大きな汚点」とあるが、これはどういうことを表しているか。「大きな汚点」が表していることとしてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母が迎えに来るまでにはあと二カ月以上もあり、兄である「ぼく」とも遠く離れているため、弟の心細さが日に日につまっていることを表す。  
 イ 「ぼく」に心配をかけまいとして葉書には本当のことを書いてこない弟について、「ぼく」がますます不安になっていることを表す。  
 ウ 料理の汁の乱れ飛ぶ店のカウンターでしか葉書を書くことが許されないほど、弟のおかれている状況がつらいものになっていることを表す。  
 エ ライメン屋で働かされているだけでなく、おじさんから暴力をふるわれている弟を「ぼく」が何とかして助けたいと心を痛めていることを表す。

(九) 傍線部⑪「きな臭い匂<sup>にお</sup>いが立ちのぼっているように思われた」とあるが、

- (i) 「きな臭い匂い」から「ぼく」はこのあと何が起こると感じるのか。二十字以内で答えなさい。(句読点を含む)  
 (ii) この時「ぼく」が「きな臭い匂い」を感じたのはなぜか。四十五字以内で答えなさい。(句読点を含む)

(十) 「 A 」～「 C 」に入る適切な会話を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ……命令されたのか？  
 イ そうか、店に寝るわけか  
 ウ 断るとぶたれるんじゃないか、そう思っ<sup>て</sup>引き受けたんだよな？  
 エ バカ、どうして学校を休んでいるんだ  
 オ やあ、なんだ、ここであえるなんて思っ<sup>て</sup>いなかったなあ

受検番号

② 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人類が人為的にCO<sub>2</sub>(二酸化炭素)を排出することによって地球がどんどん温暖化して、やがて北極や南極の水が融けて、海面が大きく上昇し、そうなったら東京の下町は海の底に沈んじゃう。なんて恐ろしい話が流行っているけれども本当なんだろうか。CO<sub>2</sub>を削減するために京都議定書という国際的な取り決めが発効したけれども、①世界のリーダーを自認するアメリカはなんで議定書に参加しないんだろう。

大変だ大変だと騒いでいる人たちも、それほどaシンコクそうな顔をしていないのはどうしてかな。東京が海底になる頃には、自分たちはどうせこの世の人ではないから、本当はどうでもいいと思っているのかもね。だとしたらなんで大騒ぎするんだろう。地球の未来を心配している真面目な人たちもいるんだろうけれど、根が不真面目で疑り深い僕は、環境問題って実はおいしいビジネスで、これで儲けている人たちが大変だ大変だと騒いでいるんじゃないかと勘ぐっているわけです。

「②正義は重い。なぜなら正義は大量の金で裏打ちされているから」って古い格言もあるくらいですからね(ウソです。そんな格言はありません。僕が今、作ったのです)。

というわけで、まずは原因はともかく、地球は本当に温暖化しているのかどうか調べてみよう。

東京に住んでいると何だか年々暑くなっている気は確かにする。③私は東京の西のはずれ八王子に住んでいるけれど、都心との温度差はかなりある。真夏の夜でも八王子ではクーラーを付けなくても過ごせる日の方が多いが、都心では逆にクーラーなしで過ごせる日の方が少ないだろう。真冬になると、家の周りでは時々氷が張るが、都心は滅多に氷が張らない。アロエやノボタンといった暖地の植物は八王子では地植えにしておくとお凍って枯れてしまうが、都心では冬を越す。

都心でも八王子でも緯度には変わりはない。都心は海に近いという影響はあるにしても、これだけ差があるのはどうしてだろう。僕は子供の頃は東京の下町に住んでいた。夏は暑かったが、クーラーなんてなかったから、今と比較してどっちが暑かったか実感としてはあまりよくわからない。ただし、冬は寒かった。それは確か。庭の小さな池に氷がガチガチに張ったから。だから、東京が暑くなってきたのは実感としては全くその通りだと思う。でもそれは、今流行りのグローバル・ウォーミング(地球規模の温暖化)じゃなくて、ローカル・ウォーミング(局地的な温暖化)じゃなかるうか。

渡辺正『これからの環境論』(日本評論社)という本がある。「(1)危機を超えて」との副題からわかるように、環境危機を煽るbフウチョウに批判的な本だ。その中にNASA・ゴダード宇宙研究所(GISS)が公表している世界各地の気温変動のデータの一部分が引用してある。東京の気温を見るとここ百年ほどで3℃上昇したことがわかる(1)。

一方、静岡県の網代や伊豆諸島の三宅島では、一九四〇年頃から一九九〇年頃まで気温はほとんど変わらない。都市の気温は確かに上昇しているかもしれないが、田舎では上昇していないとなると、都市の温暖化はコンクリート、ジャングルや冷暖房などによる、いわゆるヒートアイランド現象で、地球規模の温暖化ではないのかもしれない。グリーンランド、アラスカ、昭和基地やアムンゼン・スコット基地(南極)などの気温変化のデータも、一九四〇年頃から(南極では一九六〇年頃から、それ以前のデータはない)現在に至るまで、これらの地域の温度はほとんど上昇も下降もせず推移していることを示している。南半球の田舎、たとえばチリのイースター島や南ア共和国のカルビニアではむしろ気温は下がり気味だ。

地球規模の温暖化という話で最も有名なデータは先ほど出てきたGISSが公表している世界の平均気温のグラフだ(2)。細かい変動はあるものの一九〇〇年頃から一九四〇年頃まで平均気温は上昇し続け、四〇年間で約〇・四℃上昇した。それから一九七〇年頃まではむしろ下降気味で三〇年間に〇・二℃近く下がった。そこから一気に上昇に転じ、現在までの三五年間で〇・五℃以上上がった。

このグラフを信じれば、確かに平均気温は上昇しているように見える。しかし、コンスタントに上昇しているわけではなく、一九六〇年代から七〇年頃まで、気温は前後に比べてかなり低かったのである。だから、このまま上昇し続けると考えるよりも、むしろ再び下降に転じると考えるほうが合理的だ。教

受検番号

年間、平均株価が上昇し続けても、そのまま永遠に株価が上がり続けると考えるバカはいない。

実は一九六〇年代後半から一九八〇年頃まで、科学者たちは地球寒冷化を予想していたのである。一九七〇年代には、日本でも「氷河期が来る」といった類の本がたくさん出た。たとえば、根本順吉という有名なキショウ学者は一九七四年に『冷えていく地球』という本を出版している。その同じ根本氏が一九八九年に出版した本のタイトルは『( 2 ) 地球』である。地球の平均気温が下降気味の時は、このままではやがて氷河期になるという話が流行り、上昇気味の時は、やがて南極の氷が融けて大変なことになるといいう話が流行る。昔、まだ真面目な(④バカな)学生だった時に、地球寒冷化論にさんざんたまされた私は、今日び流行っている地球温暖化論も、とてもにわかには信じるわけにはいかない。

それに、地球温暖化論者が金科玉条のように崇めている⑤ G I S S の世界の平均気温のデータもそれほど信憑性があるわけでもなさそうなのだ。G I S S の平均気温は世界各地六三〇〇カ所で測定した気温の平均である。先に記したように、この中に都市が多ければ、都市の( A )・ウォーミングの温度上昇が反映され平均気温は上昇する。CO<sub>2</sub>の濃度は都市でも田舎でもほとんど同じだから、もしCO<sub>2</sub>の濃度と気温の関係だけを調べたいと思えば、田舎の気温を集めてそれらの平均値を採用すべきであろう。G I S S は、このような批判を考慮して都市の気温は都市化を考えて補正しているとのことだが、都市の気温はそもそもデータから外す方が、( B )・ウォーミングが起きているかどうかを検証するには有効であろう。それに測定地点はアメリカとヨーロッパに偏り、海の上にはほとんどないのだから、G I S S のデータから、地球の真の平均気温を推定するのは、そもそも d ボウロンなのである。

G I S S の平均気温のグラフは世界各地で温度計で測定したデータに基づいている。温度計が設置してある百葉箱の環境が少し変化すれば、測定温度は微妙に変化する。たとえば、周囲にビルが建って風通しが悪くなれば、気温は少し上昇するし、反対に風通しがよくなれば、気温は下がり気味になる。それ以外にも百葉箱のペンキがはげたりといった様々なファクターが関与するので、もう少しましな地球の平均気温の測定方法はないのだろうか、と誰でも考えるだろう。それがあつたのだ。

人工衛星を使って地球全体の温度を測ることができるのだ。キショウ衛星ノアに積んだ計測器で酸素分子が出すマイクロ波の波長を測って温度に換算する。北緯八〇度から南緯八〇度まで、地球をくまなく測っている。測っているのは対流圏の大気(地表から高さ八キロメートルあたりまで)。測定は一九七九年から始まって今も続いている(③)。このデータを見る限り、対流圏の気温は月々の変動こそ激しいけれど、平均的にはそれほど上昇している様子はない。衛星からの気温測定に関しては、衛星の落下による補正をすると地上測定に近い値になるとの批判もあるが(補正をしても元データとそれほど変わらないとの反論もある)、地球の気温が(※)登りに上がっているという巻に流れている e ゲンセツは、それほど信用できるものではなさそうなのは確かであろう。

(池田清彦『環境問題のウソ』一部改めたところがある)

(一) 波線部 a ～ e のカタカナを漢字に改めなさい。

a シンコク      b フウチョウ      c キショウ      d ボウロン      e ゲンセツ

(二) 傍線部①「世界のリーダーを自認するアメリカはなんで議定書に参加しないんだろう」とあるが、本文から読み取れる筆者の主張から考えると、筆者はこの事実をどのようにとらえていると考えられるか。もつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア アメリカは日本と全く違う考え方を持った国なので、参加しない理由は理解できないと思っている。
- イ 世界中で取り決めたことに大国であるアメリカはどうして従わないのかと、苦々しく感じている。
- ウ アメリカは自国の事情にもとづいて、それなりの理由で議定書に参加していないのだと思っている。
- エ 一国でも参加しない国があるのならば、いつそのことどの国も参加しないほうがましだと感じている。
- オ アメリカは自分をリーダーだと思っているので、他の国も参加しないように誘うだろうと予想している。

受検番号



(七) ( 2 ) に五字以内の語句を補って、本のタイトルを完成させなさい。

(八) 傍線部④「バカな」とあるが、筆者はどのようなところを「バカ」だと考えているのか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今では疑っている地球温暖化論を本当だと考えたところ。

イ いろいろな環境問題の説明についていけなかったところ。

ウ 環境問題に関する主張をころころと変えたところ。

エ そのときどきで変わる他人の主張をうのみにしたところ。

オ 不真面目で疑り深いせいで、人の主張を理解しなかったところ。

(九) ( A ) ( B ) に入る言葉の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A グローバル B グローバル

イ A グローバル B ローカル

ウ A ローカル B グローバル

エ A ローカル B ローカル

(十) 傍線部⑤「GIS Sの世界の平均気温のデータもそれほど信憑性<sup>しんぴやうせい</sup>があるわけでもなさそうなのだ」とあるが、その理由を、本文で挙げられている順番に三つ、それぞれ三十五字程度で説明しなさい。(句読点を含む)

(十一) 二重傍線部「( ※ ) 登り」とあるが、この部分が「物事が急激に上がっていくようす」を表すように、( ※ ) に生き物の名前を入れなさい。

受検番号



